

■ ENEOSホールディングス(5020) CCS/CCUS 事業説明会 Q&A

1. 日 時 : 2024 年 8 月 28 日(水) 14:00ー15:10
2. 出席者数 : 109 名
3. 主な質疑内容 : 下記

－ 本資料には、将来見通しに関する記述が含まれています。末尾に注意事項を記載しています。－

Q. 先進国の制度をご紹介いただいたが、各国の支援制度のメリット・デメリットを比較したうえで、御社としてはどのような支援を政府に期待するのか、また現状の政府の検討状況を教えていただきたい。

A. 海外の政府支援制度のうち、イギリスの例では、CCSにかかるコストに対してカーボンプライシングとの差額が補填されている。この制度は排出事業者や貯留事業者に一定の利益を保証したうえで、値差を補填する設計となっているのがポイント。日本でも経済産業省を含めて、こういった海外の事例を参考にした制度設計が進められることを期待している。

Q. 長期的にはCCSのコストを再生可能エネルギーや水素と同様に、競争力のあるものにしていきたいと考えているという理解でよいのか。それとも通常のカーボンプライシングを超えるインセンティブや政府からの補助が永続的に必要だと考えているのか。

A. 長期的にはCCSコストが低減し、カーボンプライシングが高い世界観においては、補助金なしでも十分にビジネスとして成立する。そうでなければ、コストが下がらず国民負担も大きくなる。
2年前に経済産業省が立ち上げたCCSの長期ロードマップ検討会におけるコスト目標や、IEA想定
のカーボンプライシングの水準を踏まえると、将来的に政府の支援がなくなっても民間企業だけで自走
できるビジネスモデルは十分に想定できる。

Q. 日本国内でCCSを推進するハードルについて教えてほしい。諸外国、特に産油国は、枯渇した油田をCCSの貯留に利用できるため、コスト面でのアドバンテージがあると理解しているが、これがどの程度コストの違いとしてあらわれるのか。

A. ご指摘の通り、海外のCCSでは枯渇した油田にCO₂を圧入することが一般的である。
一方、日本ではそのような枯渇した油田が少なく、日本で新たにCCSを始める場合、探査に係る投資
や操業を開始してからモニタリングにもコストがかかることは事実。
ただし、CCSのコスト全体に占める割合としては貯留コストよりも分離回収コストの方が相対的に大
きく、後者のコストについては海外と日本で大きく変わらないことを踏まえると、バリューチェーン全
体のコストとして競争力にそこまで大きな差が生じることはないものと考えている。

以 上

本資料には、将来見通しに関する記述が含まれていますが、実際の結果は、様々な要因により、これらの記述と大きく異なる可能性があります。かかる要因としては、

- (1) マクロ経済の状況またはエネルギー・資源・素材業界における競争環境の変化
- (2) 法律の改正や規制の強化
- (3) 訴訟等のリスク

などが含まれますが、これらに限定されるものではありません。